歴博資料の「問い」から学びのスイッチをいれる

－江戸時代「鎖国」体制下の絵図からみた中国－

関西大学中・高等部　宮﨑　亮太

１．実施学年および教科・領域

高等学校第３学年日本史Ｂ選択者（17 名）対象　　地理歴史科・日本史Ｂ

２．学習のねらいと博物館の活用との関連について

（１）単元名

鎖国　（実教出版『日本史Ｂ』第７章 第５節）

（２）ねらい

①学習指導要領との関連

この実践では、高等学校学習指導要領にある「（３）近世の日本と世界」の「イ　近世国家の形成」を範囲とする。また、「近世国家と社会や文化の特色について、国際環境と関連付けて考察させる。」と記載されていることから、世界史Ｂの「（４）諸地域世界の結合と変容」の「ア　アジア諸地域の繁栄と日本」との関連も持たせて授業内容を組み立てた。

②単元の目標

・個人で取り組んだワークをグループ内または全体で共有することができる。その際、協調して取り組み、それぞれの考えを受容することができる。（関心・意欲・態度）

・資料から読み取ったことを既習事項と関連させて理解することができる。（思考・判断・表現）

・資料から具体的な「もの」と「こと」に分けて読み解き（看図アプローチ）※1、そこから授業テーマに沿った分析を行うことができる。（思考・判断・表現、資料活用の技能）

・江戸時代初期の対外関係から鎖国体制の成立と鎖国体制下の外交について基本的な事項を理解している。（知識・理解）

（３）博物館との関連

①活用方法

非来館型活用

②活用資料

歴博画像データベース　H-25　「唐人屋舗景」

（４）指導観

①本校の教育方針

※１　鹿内信善　『改訂増補　協同学習ツールのつくり方いかし方』　2015 年　ナカニシヤ出版
鹿内信善　『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち-看図作文レパートリー』　2014 年　ナカニシヤ出版

本校では、様々な事柄について主体的に受けとめ、考え、判断し、自らの意見を獲得することに努める。また、相手の立場を踏まえて、自らの考えを発信できる「考える頭と感じる心」を育成するという教育目標のもと、2014年度からＳＧＨ（スーパーグローバルハイスクール）に文部科学省から指定されたことを請け、学内外のリソースと連携しながら探究的な学習と協同的な学習を通してコミュニケーション能力、問題解決能力の育成に取り組んでいる。

②日本史の学習方針

今年度、高校２年時に日本史Ｂを３単位、３年時に日本史Ｂを２単位、日本史演習３単位が選択科目として開講されている。同じ法人内の関西大学に進学する生徒が約８割いるが、内部進学に関して選考があるために外部受験の生徒と同様に、教科書に沿った日本史の膨大な知識を理解する学習を 10 月中にほぼ終了するように進めていかなくてはならない。このような状況の中で、歴史事項を網羅的かつ合理的に進める一方通行の授業では､様々な歴史事項の関連性を見出して歴史像を自分で描いてみて、生徒たちの視点で発見するという歴史を学ぶ醍醐味を生徒たちが感じることは難しい。

そこで、学習の動機付けとして重要な、問い（テーマ）設定を工夫し、生徒自らが問いを立てて、探究できるようになること、また、絵画や絵図、実物などの史資料を通じて「モヤモヤ感」が生徒たちに起きる状況をつくり、それを解消するために個人で思考した上で、対話をして学ぶ姿勢をつくることを学習方針としている。

上記の通り､史資料を活用した探究的学習を深めることを目標に 2012 年度より歴博の資料を使った実践を行っている。これまでは、非来館型利用で歴博資料を使った教材開発を行うために博物館の研究機能を活用して、史資料についての蓄積された研究を授業に反映することを目標としてきた。

そして、昨年度からは歴博資料を使う有用性を検証することを目標として取り組んできた。具体的には、アクティブ・ラーニング型授業や看図アプローチ、対話型鑑賞法※2、解釈型歴史学習※3、ＲＬＨ学習※4、パフォーマンス課題※5やルーブリック（評価指標）などの評価のあり方など様々な理論や手法を通して、歴博資料を使った学習の有用性を補強する試みを行ってきた。

また、次期学習指導要領の改訂が徐々に具体化していくなかで、歴史総合（仮称）を見据えて､「世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する科目」であり、資料を活用した「問い」を設定し、考察や対話などを通じて表現することが求められていることから、対外関係に関わる単元において、歴博資料を使った実践に取り組んでいる。

※２　フィリップ・ヤノウィン　『学力を伸ばす美術鑑賞　ビジュアル・シンキング・ストラテジーズ』　2015 年　淡交社

※３　土屋武志　『解釈型歴史学習のすすめ　対話を重視した社会科歴史』　2011 年　梓出版社

※４　スタンフォード大学サム・ワインバーグ教授を中心とする研究グループが提唱する「歴史家のように読む（Reading Like a Historian)」アプローチ。

※５　パフォーマンス課題とは、リアルな文脈の中で、様々な知識やスキルを応用・総合しつつ何らかの実践を行うことを求める課題。

３．指導計画（２時間扱い）

過程	時間	○学習活動及び内容	□指導上の留意点　■評価の観点
導入	５分	○本時の目標や取り組みの方法について説明を聞く。 ○「唐人屋舗景」は日本のどこを描いたか、場所を考える。 ○資料全体を俯瞰し、資料のテーマを理解する。また、資料への関心を持つ。	・「唐人屋舗景」（複写)とワークシート＜資料参照＞を全員に配布する。
展開	３分	○卓袱料理の写真を提示して、どのような料理が含まれているかを考える。（個人ワーク） ○明清の交替と江戸幕府の「鎖国」政策について説明を聞く。	□和・中華・洋（オランダ）の要素が入っていることから、長崎の文化の多様性とオランダに着目されがちであるが、中国の要素にも着目させる。
	10 分	○資料から読み取ることができる「もの」を名詞で 10 以上書き出す。	□日本史Ｂの鎖国の復習に加え、17 世紀危機における東アジア諸国の対外関係再編を関わらせて説明を行う。
	15 分	○資料から読み取ることができる「こと」（○○が○○している。○○が○○になっている。など）を５つ以上書き出す。 ○資料全体を見て、読み取ったことを名詞で書き出し、それを踏まえて短文にする。この時に可能であれば、「問い」を立てる。	□４人（５人）グループ編成について指示する。 □個人で思考を深め、グループでグループメンバーの意見を共有させ、その後全体で各グループの意見を共有させる。 □資料全体を俯瞰し、生徒各自が着目したポイントを共有させる。資料を細部にわたってみることで資料の考察を深めさせる。 ■個人で思考したことをもとにしてグループで意見を共有することができたか。 ＜ワークシート、関・技＞ ■グループワークにおいて、資料を観察して気付いた点の中から、課題を発見できたか。 ＜ワークシート、思＞
		○資料に描かれている行列に着	■資料に描かれている行列につい

	15 分	目する。この行列に描かれているのは、どのような人々か考える。 ○資料に描かれている行列はどこに向かおうとしているのか、何をしようとしているのかを考える。 ○長崎に入港した清の商人一行が「ボサ上げ（入船祭）」を行っている様子や行列後方に役人や遊女などがいる様子を資料から読み取る。	て、想像して思考し外挿する、ワークシートに記入して協調してグループで意見を共有することができたか。 ＜ワークシート、思・技＞ □個人で思考を深め、グループでグループメンバーの意見を共有させ、その後全体で各グループの意見を共有させる。 ＊ここで示す「外挿」とは絵画テキストでの記述内容を越えて、結果を予想したり、発展的に考えたりする活動をさす。
まとめ	２分	○本時について振り返り、次回のについての説明を聞く。	□ワークシートを一旦回収する。

過程	時間	○学習活動及び内容	□指導上の留意点　■評価の観点
導入	５分	○前時の内容を振り返る。また、本時の内容の説明を聞く。	□ワークシートを返却する。
展開	15 分	○資料がどのような情報を伝えようとしているか。また、人々はこの資料にどのような情報を求めたかについて考える。 ○資料は唐人屋敷の様子を示したものであるが、発行されたのが 1780 年であることを踏まえ、人々の海外への関心の高まりという社会的背景を認識する。	□ワークに取り組む前に、資料が 1780 年に発行されたことを説明し、1780 年がどのような様子であったか教科書や資料集で確認した上で、ワークに取り組むよう指示する。 □個人で思考を深め、グループでグループメンバーの意見を共有させ、その後全体で各グループの意見を共有させる。 ■資料を構成している諸要素と既習事項を様々関連付けることができたか。 ＜ワークシート、思・知＞
	10 分	○資料をもとに、江戸時代の鎖国	■既習事項と資料を関連付けて、発

		体制下で、清からやってきた人々とどのように共生・共存してきたのか考える。 ○長崎絵として土産物として販売されていたことや唐人屋敷の様子を比較的正確に把握しようとしていることから、海外への興味関心と相互に知ろうとする姿勢が大切であることを理解する。	展的に考えて、自分の考えを表現することができたか。 ＜ワークシート、思＞ □個人で思考を深め、全体で共有できるようにする。
	15 分	○授業を振り返り、全体を通して気づいた点や疑問点をワークシートに記入する。 ○授業全体を通しての自己評価をワークシートに記入する。	□個人で思考を深め、グループでグループメンバーの意見を共有させ、その後全体で各グループの意見を共有させる。
まとめ	５分	○今回の授業の目的を再度確認し、この資料を選んだ理由やこの資料をめぐる背景についての補足説明を聞く。	□ワークシートを回収する。

４．実践の概要

本実践は 11 月 16 日（水）・19 日（土）の平常授業において、高等部３年生の日本史Ｂ選択３クラス（17 名・17 名・７名）のうち、１クラス（17 名）を対象に実施した。本校では 10 月中に日本史Ｂの教科書の内容をベースにした通史学習はほぼ終えており、11 月末から 12 月初めに行われる卒業考査までの期間に例年、資料の読み解きの授業などを行っている。なお、本実践を行ったクラスは内部進学希望者がほとんどであるが、数名外部受験を希望する生徒が含まれている。

（１）資料選定の背景

今回は「唐人屋舗景」を資料として使っているが、資料の中に描かれている 17 世紀半ばに整備された唐人屋敷に対する理解と、なぜ 18 世紀末にこの資料が作製されたのかという２点について考えることをねらいとした。生徒たちは江戸時代の対外関係史を既習しているため、知識を切り結んで資料を通して思考できるのではないかと考えた。

また、高等学校の新学習指導要領における歴史科目の改訂で導入が予定されている歴史総合（仮称）では、「歴史の大きな転換に着目し、単元の基軸となる本質的で大きな問いを設け、諸資料を適切に活用しながら、比較や因果関係を追究するなど社会的事象の歴史的な見方・考え方を用いて考察する歴史の学び方を身に付ける。」ことが柱となっている。これを踏まえ、「鎖国」体制との確立と動揺は日本史の上では歴史的な転換点であると考え、この２つを同時に考えられる資料の一つとして「唐人屋舗景」を選定した。

なお、授業で使用する資料については、歴博の総合展示・企画展示・特集展示からヒントを得ている。また、図録や展示解説、歴史系総合誌「歴博」を参考にすることも多い。気になった資料について歴博画像データベースで検索し、画像データを貸与していただき授業に活用している。いずれにしても展示を見た際に、授業者が興味関心を強く持った資料はメッセージ性も強いと言えるのではないだろうか。

（２）単元における知識理解の工夫

教科書の内容理解に多くの時間を費やすため、資料を活用して考察を深めるところまで手が回らないという実情もある。知識定着を目的とした一方通行の授業デザインを工夫することにより、資料を使った授業は難しいという既成概念を変えることにつながるのではないかと考える。

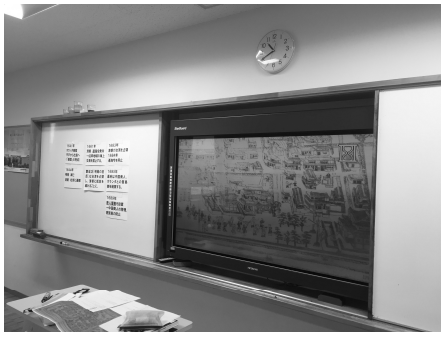
①アクティブ・ラーニング型授業のデザイン※6

学習が促進される条件として、学習への動機付けや自分と他者の理解の間に葛藤や躊躇が生じることなどが挙げられる。その条件を生かした授業デザインとして、必要な知識を獲得する「内化」とその知識を実際に適応してコンフリクトの解決を試みる「外化」を、生徒の理解度や能力に合わせて適切に組み合わせて、最後は「内化」で終えられるようにするように授業をデザインするように努めている。

「内化」と「外化」を通して「わかったつもり」を構築し、それを最終的に「わかった」に導くために、様々な「他者」の刺激を活用する。この場合の「他者」は必ずしも生徒間だけではなく、ICT の活用やコンセプトマップ、マインドマップも「他者」として活用できる。「内化」は個人を基盤として、進度に応じて個人から集団のワークを展開し、最終的に個人で思考することが理解の醸成につながる。

今回の実践においては、上記の論を基礎として展開を試みた。博物館にあるような絵画や実物の資料は学習への動機付けのための材料として適している。つまり、生徒は資料を提示されたことによって、モヤモヤ感が生じる。資料を通して自分たちなりの問いを立てて思考を深め、協同して学習することによって「わかったつもり」を「わかった」へ変えていく、良いツールになるになるのではないかと考えている。

歴博資料を使った実践を普及することも博学連携研究員会議の目的として挙げられているなかで、絵図や実物資料といった資料の有用性を示すという点で、冒頭で記した理論的な背景を前提として、今回の実践に取り組んでいることを述べておく。



ＫＰ法を使って概要説明している場面

②ＫＰ法

ＫＰ法（紙芝居プレゼンテーション法）とは、紙に講義の要点を数枚書き出し、講義を進めながらホワイトボードに貼っていくプレ

※6　安永悟・関田一彦・水野正朗編『アクティブラーニングの技法・授業デザイン』2016 年　東信堂関西大学高大連携セミナー「高校教員のためのアクティブ・ラーニングを創る！」内容より。

ゼンテーション法であり、思考整理法である※7。これによって資料の説明時間を短縮できることや、資料説明や背景となる歴史事項の整理をしやすくなる。また、資料を読み解く時間をできるだけ長く確保することができるという利点がある。

（３）学習活動における生徒の様子

①１時間目

通常授業は教科書や資料集を中心に講義型で進めていくために、資料を提示するとそれだけで今日の授業はどのような内容か生徒は興味を持った。

以前は気付いた点を自由に記述するという形を採っていたが、今回は全体を俯瞰するために、気付いた「もの」を名詞で挙げ、それをもとに資料から読み取ることができた「こと」を文章にして挙げるという形に変えたところ、生徒は作業に取り組みやすかったようである。

このワークでは、多くの気付きが得られた。具体的には唐人屋敷が塀で囲まれていることや「天后宮」「土地神」などの宗教施設、唐人屋敷内には多くの階段があり、平地ではないようであるなどである。個人で思考した後、グループで共有し、全体でも共有した。最初のワークは少し時間をかけて丁寧に行った。自分の意見以外は色を変えてワークシートに書くように指示を出すことで、自分の意見と他者の意見を比較できるようにした。

次に、資料の下部に描かれている中国商人ら一行が天后宮に「ボサあげ」という、長崎に無事入港したことを感謝する祭祀の行列について、生徒に着目してもらった。この行列は何をしようとしているか､どのような人々がいるかなどを考えた｡しかし、行列の様子から生徒の多くは予測がついたようで、資料に対する興味をより惹きつけるということにはならなかった。ただ、行列の最後尾に奉行所の役人らしき人物が描かれていることや遊女も描かれていることにも注目してくれたため、唐人屋敷をめぐる支配や遊女の出入りは許可されていたことなどについて触れることができた。

②２時間目

前時で行ったワークをもとに、本時では資料が成立した背景について考えることを主眼に置いた。この資料はどのような情報を伝えようとしているか、また、人々はこの資料にどのような情報を求めたのか、という問いを立てて、個人で思考しグループでグループメンバーの意見を共有した。

意図としては、「唐人屋舗景」は唐人屋敷が成立した 17 世紀中頃をそのまま描かれているわけではなく、実際は長崎絵として 18 世紀後半から 19 世紀にかけて、さかんに制作されたことを踏まえ、唐人屋敷を含めた異国文化がなぜ関心を持たれたのかを考えてもらうことにある。しかし、実際は教員の説明に飛躍があったせいか、意図が生徒たちに十分伝わっていなかったため、若干の消化不良はあった。あとで、教員から説明を行ったために多くの時間を要してしまった。

ここでは、観光マップの役割や日本の人々が外国の文化や暮らしに関心があった。

※７　川嶋直　『ＫＰ法シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』　2013 年　みくに出版

日本と中国が混ざった街の様子について伝えるなどの意見が出された。

次に、江戸時代の「鎖国」体制下で中国の人々とどのように共生・共存ができたのかについて、資料を通して考えてみた。キリシタンの弾圧やポルトガル人、スペイン人などの追放など様々な統制が行われたなかで、外国人や宗教などの外国文化をどのように受容してきたのかという現代的課題にもつながる問いを立てた。生徒からは「幕府が統制することで共存が可能であった」という意見と「長崎絵などに見られるように、互いに興味関心を持つことができたから共存が可能であった」という意見が多く見られた。

最後に、全体の振り返りとワークシートに示していた評価チェック欄に記入する自己評価を行った。振り返りでは、「絵図は見る人によって捉え方が変わることがわかった」、「絵図から読み取ることが難しかった」、「絵図には多くの情報が込められていることがわかった」などの意見が挙がった。

限られた時間の中で資料を取り扱うので、余りにも多くの情報が資料の中にあると消化不良になり、情報が少ないと展開が難しい。いずれにしても資料選定と授業テーマをどのように設定するか工夫がさらに必要であると感じた。

５．成果と課題

（１）成果

・生徒が資料を読み解く際に、看図アプローチの手法を参考にして、名詞にして挙げてみるなど作業を絞り込んだ。これによって、ただ単に気づいた点を挙げるという指示よりも生徒は読み解きに入りやすかった。

・資料に描かれている唐人屋敷と資料が作成された背景と２点について考える実践であったため、様々な歴史事項を結合して考える展開ができた。

・資料から発見したことが教科書や資料集を通して学習する日本史や世界史に関する歴史事項と有機的に結合することがわかり、生徒の感想も資料を使った学習について概ね好評であった。

・資料を使った学習の有用性について、パフォーマンス課題やコンセプトマップ、ルーブリック評価など様々な理論的補強によって、深化させることができた。

（２）課題

・資料についての研究成果を歴博教員との連携によって生徒に分かりやすく伝え、資料に対する考え方を理解することによって、歴博に限らず博物館への関心を高めることができたか検証が不十分であった。今後も継続して取り組みたい。

・資料から読み取ったことをもとにして立てた「問い」について、学校図書館資料を活用するなどしてもっと深める時間をとり、探究的学習ができれば良かった。

・授業全体についてのルーブリックを予め提示して、自己評価、生徒間評価、教員評価を行いそれを検証するところまでできればよかった。

・コンセプトマップを活用して、資料から読み取ったことを体系化することができれば良かった。

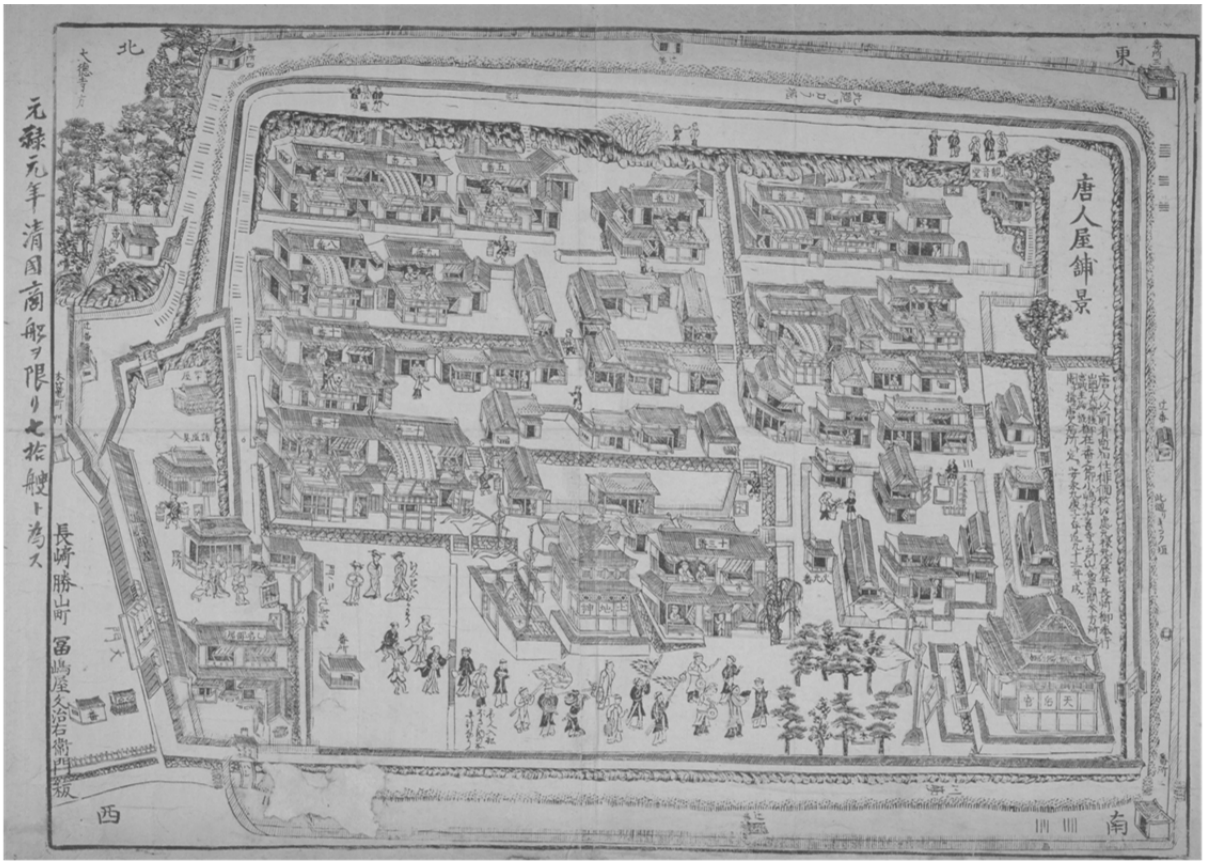
＜参考資料＞

国立歴史民俗博物館　『西のみやこ　東のみやこ−描かれた中・近世都市−』　2007 年

松浦章　「清「展海令」の施行と長崎唐館設置の関係」(『関西大学東西学術研究所紀要』41)　2008 年

山本博文　『さかのぼり日本史　外交編５江戸　外交としての“鎖国”』2013 年　NHK 出版

＜参考＞「唐人屋舗景」



2016高３日本史Ｂ　ワークシート　　Ｓ３（　）（　　）番　氏名（　　）
テーマ　＜江戸時代「鎖国」下で、中国の人々との共生・共存はどのように為し得たのか＞

１.この資料に描かれている場所は、なんという所だろう。
（　　）

２.この絵には何が描かれていいますか？
①資料から読み取ることができるもの（絵の中、周りに書いてある文字から拾い出すことも可とします）を名詞で１０個以上書き出そう。（例：門、堀など）
②資料から読み取ることができること（例：○○が○○している。○○が○○になっている。など）を５個以上書き出そう。
※まずは各自で読み解いて、グループ内で交流。その後、全体で共有しよう

３.絵図に描かれている行列について見てみよう。
①行列は、どのような人々が描かれているだろう。
②行列は、どこへ向かおうとしているのだろう。また、何をしようとしているのだろう。
※まずは各自で考えて、グループ内で交流しよう。

４.この資料はどのような情報を伝えようとしていますか？また、人々はこの資料にどのような情報を求めたのだろうか。

＜自分の意見＞ ＜グループや全体で共有して気付いたこと＞

５．江戸時代「鎖国」下で、中国の人々との共生・共存はどのように為し得たのか。資料を通して考えたことを書いてみよう。

６．今回の授業を通して、学んだことやわかったこと、疑問におもったことなどを書いてください。また、担当者に対する意見・質問でも良いので書いてください。

＜評価チェック＞○・△・×を記入しよう。
（　）ペアワーク・グループワークでは協力することができた。
（　）ペアワーク・グループワークで他者を否定せず、意見をしっかり聴く（受け入れる）ことができた。
（　）自分がフリーライダーにならず主体的に参加することができた。
（　）ワークシートは質・量ともに十分書くことができた。
（　）無理せず、楽しんで参加することができた。
（　）資料をじっくり見て思考し、多くの気付きを得ることができた。
（　）コンセプトマップはこれまでの振り返りをした上で、質・量ともに十分書くことができた。

＜資料＞ワークシート